



メン★ドル

～私たちがアイドル
になったわけ～

黒色大聖堂

ペルソナ復活！？の巻

あらすじ「若松アサヒ、河内ナミ、音羽ヒナタの三人は、かつて人気アイドルグループとして人気絶頂のまま姿を消した。日々の生活には満足していたが、アイドルになるという夢を捨て切れず、再びアイドルを目指すことを決意した」

配役 若松アサヒ（小嶋陽菜）、河内ナミ（高橋みなみ）、音羽ヒナタ（峯岸みなみ）

公園を後にした三人が、こうして並び立って歩くのは長いことなかった。

今となっては、かつてトップアイドル、ペルソナとして活動していたことを夢のように思う事もある。オーディションの帰りに、たまたま重要なデータの隠されたキーホルダーを拾ったことで、それまでの人生とは大きく異なる経験をした。追ってから逃れるために男装をし、その性別を偽って男性アイドルとして活動することになったからだ。

そんなことも、こうして街路樹が色づくほどに時が経過してみると遠い過去のことだ。だからだろうか、女としての姿で歩く三人に声をかけてくる者はいない。ペルソナが生放送の歌番組で謎の失踪を遂げてから、すでに一年が経とうとしていた。

「そういえば確か、ナミってガテン系のバイトをしてるんだよね？」

「ああ、そうだぜ。これから春になったら引越しのバイトもやろうと思ってるんだ。キツイけど儲かるんだよなあ」

「ヒナタは、服屋でバイトしてるよ」

「え？」

アサヒとナミの声が重なった。絶対に接客業なんて務まるわけがないと思ったが、二人はぎりぎりのところで言葉を飲み込んだ。ヒナタだけは不思議そうな顔をしている。

「服屋でバイトなんて電波もやるな。あたし、古着とか結構好きなんだよ」

「電波じゃなくて、ヒナタは地上の天使なの。それに古着じゃなくて、ロリータブランドのお店」

そう言ってピンクでひらひらしたスカートを軽く摘むと、笑って見せた。

「だよね」

「だな」

ヒナタを無視して、アサヒとナミは嘆息した。フリルまみれのロリータ全開の装い。二人は、その格好を密に、糖分たっぷりと形容している。

「それよりさ。こうして久しぶりに三人で顔を合わせたんだから、お茶でもしようぜ」

「賛成。あたしも二人に聞きたいことあるし」

「ヒナタも～」

「よし、決まりだな」

駅前の都内でよく見る大手チェーンのカフェに揃って入って行く。休日の午後だからか、席

は思っていたよりも埋まっていた。それぞれ飲み物を注文すると、一番奥のテーブルへと向かう。

「アサヒって確か今は大学生なんだよな？」

オレンジジュースにストローを付きたてると直ぐにナミが聞いた。

「そうだよ。私立夢園短期大学。今は一年」

「ところで、あのジローって奴と今でも付き合ってるのかよ？」

「まあねえ」

軽く嘆息しながらアサヒが返事をした。

「分からないよなあ。あんな頼りなさそうな男の何処がいいんだか」

「ちょっとお、ナミだってレイと付き合ってるじゃん。しかも女同士だし」

「ば、ばか。レイとは何ていうか友達で、その……っていうか、最近は会ってないんだよ」

ボーイッシュなナミの顔立ちが、一瞬で赤くなり、すぐに語尾が弱々しくなった。

「ヒナタ知ってるよ。レイさん今はアメリカに仕事の拠点を移してるんだよね。世界進出で」

「そうなんだよ。だからアサヒみたいにラブラブじゃないんだよ」

「あたしだって、大学は忙しいもん。そんな遊んでるほど暇じゃないですう」

唇を付き出して、反論した。

「それにナミの場合は、レイさんに招待してもらえば、いつでもロサンゼルスに会いにいけるじゃん」

「分かってないな、大学生は。こっちはバイトで急がしくてアメリカに行く暇なんてないんだよ。それに忙しさじゃレイだって負けてないんだよ。今は大事な時期だから邪魔したくないし」

「やっぱり、ラブラブじゃん」

「だから、ちげーよ」

アサヒが茶化したので、ナミがムキになって立ちあがった拍子にテーブルが揺れた。そんな二人の言い合いを無視して、ヒナタは嬉しそうに携帯の待ち受け画面を見ながら満足そうにしていた。

二人が気になって覗いてみると、そこには意中の相手である黒田が写っていた。一年ほど前に、防衛庁と第三国との武器横流し事件のデーターを拾ったアサヒたちの命を狙った男だ。ペルソナを生放送中に殺すように言われた彼は、生涯最高のステージに心を動かされ、密かに三人を逃がした。そんな相手でもヒナタにとっては自分を助けてくれた白馬の王子様らしかった。

「あんな蛇みみたいな目をした野郎を好きになるなんて、やっぱりどうかしてるよな」

「違うもん。黒にゃんは、とってもいい人だもん。じゃなきゃヒナタたちのこと見逃してくれるはずないもん。ナミには大人の魅力が分からないんだよ」

待ち受け画像に、うっとりとしていたヒナタは、黒田のことを悪く言われムキになって反論した。

「そんなことより、今日の路上ライブの話しようよ」

絶妙のタイミングでアサヒが話をふってきた。

普通の女の子としての日々に、引っかけりを覚えていた三人は、初めて話をしたオーディショ

ン会場で、先ほどたまたま再会したのだった。そこからは自然に路上ライブをしようということになった。

「やっぱりさ、人前で歌うのって、すごく気持ちいいよね」

「そうそう。何ていうかさ、満たされてるって感じ？ やっぱり歌っている時の充実感は別格なんだよな」

「ひなたも、とっっっても楽しかった」

三人の視線が重なり合い、口元に笑みが浮かぶ。

アサヒは先ほど、路上ライブが終了した際に観客の男から渡されたチラシをバッグから取り出した。もし、興味があるなら受けてみてと言われたものだ。そこにはきらびやかなロゴで『第三回 ダイヤモンド新人アイドルオーディション開催決定』と書かれている。

「ヒナタは絶対にアイドルになるんだから」

「それは、あたしだって同じだ」

「じゃあ、決まり」

アサヒが二人を見つめながら言った。「この中で誰が一番早くオーディションに合格出来るか競争だね」自然とお互いの手が伸び、短く掛け声をかけた。その手の温もりも、ひどく懐かしいものだった。

帰宅してからアサヒはベッド寝転びながら、もう一度チラシを眺めてみた。書類審査は自慢ではないが、これまでに四十九回の応募歴があるだけに何の心配もない。経歴だって、ペルソナのことは書けないが、他の応募者と比べたら各段にある。最終選考までは楽に進めるはずだ。それに実技の方が逆に自信があった。

「よし」

起き上がると鏡に映った自分の顔を見つめ、曲の振り付けの確認を始めた。こうして動きを確認していると、密かに体が充実感を覚えるのが分かった。次第にステップが曲のリズムとズレてることが分かって苦笑したが、やはりブランクは誤魔化しが利かない。次第に動きにキレが戻って来るころには、額に汗が滲み始めた。部屋の温度が上がって呼吸も少しずつ荒くなってきた。

「後、二週間。頑張らなくっちゃ」

ほんのりと蒸気してくる頃には感覚を取り戻しつつあった。確かにブランクがあることは否定できないが、間違いなくペルソナ時代に鍛えられたことが体にしみ込んでいるのが実感できた。あの時は、CDデビューの前に社長から課せられた鬼のようなレッスンの厳しさから夜中に涙ぐむこともあった。そんな時は、いつもナミはL社長のことを見返してやろうぜと言い、ヒナタはうまく踊れない方がもっと辛いよ、と励ましてくれた。

喧嘩することも多かったけど、お互いにアイドルになりたいという気持ちだけは同じだった。だから、最後までペルソナとして走り抜けることが出来たのだと今になって思う。あの頃は、自分たちを冷静に見つめる余裕もない日々だったが、その充実ぶりを、こうして体で感じる。

自主レッスンを終えたアサヒは、クローゼットの棚からスポーツタオルを取り出して汗を拭いた。集中して思い切り体を動かした後は、やはり気持ちがいい。再びオーディションのチラシに目がむいた。最終合格者は三名。もしかしたら、自分だけでなくヒナタやナミも受かるかもしれない。そうすれば、また三人でアイドルが出来る。あの日々が戻って来るのだ。その時のことを頭に思い描きながら、アサヒは静かに握り拳に力を込めた。

ナミは今日の最終選考を突破できる自信で満々だった。朝に食べたのは昨日の残り物だが、カツ丼だ。それも考えようによっては、二日連続でカツ丼を食べたということになる。言ってしまえば、これ以上ない願掛けだ。必勝に必勝を期したと自負している。

『今日のオーディション、三人そろって合格しよう☆』

ナミはそう二人にメールを送った。誰が一番最初にアイドルになれるか競争しようと、あの日に喫茶店で誓い合った。でも、合格者が三人だと知って、それは直ぐに全員で受かりたいという気持ちへと変わった。きっと自分ひとりだったらペルソナを続けられなかったと思うからだ。

最初はよくオーディションで見る顔だな、程度の認識だった。どうせ自分は直ぐに受かるから、もう合う事はないと思っていたのに、実際は何度も顔を合わせるようになった。そのたびに今回は、自分だけは勝ち抜けだなという考えが打ちくだかれた。あんなキャピキャピした歌を歌うなんて、と二人のことを実技試験のたびに密かに笑っていた。

だから自分から声をかけたのは、今となっては凄く意外なことだった。そんな些細なきっかけから運命の歯車は大きく動き出した。オーディション帰りの駐車場で拾ったものが、武器横流しの機密情報を隠したものだとは思わなかったし、最初は黒田が向けた拳銃もテレビのどっきり企画だと思っていた。それが本物だと分かった時は、心臓が潰れかけた。テレビ局を全力で走り抜け、咄嗟に追ってを切り抜けるためにした変装が、アイドルへと繋がるなんて考えもしなかった。

そこからは、楽ではなかったけど、それまでの冴えない生活とは大違いだった。初めてのレコーディング、大暴れしたジャケット撮影、CDピーアールのために冷水プールに浸かったり、夜に社長に内緒で、こっそり出かけた遊園地。そして何より初めての歌番組music♪10への出場。何もかもが新鮮だった。

あの時があったからこそ、今の自分がある。それでも、やっぱりあの二人には負けたくない。そのためにはまず、自分がしっかりと合格を勝ち取らなくては。それも、ペルソナのカイじゃなくて、河内ナミとして。念願だった女性アイドルになるんだ、と心に強く誓って着替えを始めた。

昨日のメールではアサヒもヒナタも最終審査に進んだといていた。合格者の枠が決まっているから、今日はお互いがライバルだけど、それは望むところだ。それに、もし自分が落ちて二人が受かっても応援すると決めていた。そんなことを考えていたら、先ほどの返信を知らせる着メロが鳴った。これも今日は願を掛けて、ペルソナの代表曲『3seconds』に変更しておいた。ナミは少しだけ長く着メロを流してから携帯に手を伸ばした。

「ふ〜」

短く息を吐き出しながら、電車のドアを降りた。直ぐにナミからのメールに返信を返す。内心では二人にも残っていてほしいと思っていたから、ほっとした。それに二次審査まではグループが別だったので会場で会わなかった。ダイヤモンド新人アイドルオーディションは、歴史は浅いけれど、とても大きなオーディションだから応募者がとても多い。

二次は自己PRを兼ねた面接と、課題曲のダンスだった。それを自分では比較的、楽に挑むことが出来たと思う。これもペルソナの経験があったからだ。最初の頃は、ダンスレッスンの余りの長さにうんざりした。練習が終わる頃には動けなくなるほど疲れたし、しばらくは膝に力さえ入らなかった。それも、やればやるほど上手くなることが分かって、やりがいを覚えた。ダンスは二人よりも得意になろうとして、隠れて一人で練習もした。

会場へと向かう地下鉄の駅の構内にも、ポスターが貼ってあった。パステルカラーのきれいな色どりで「国民的アイドルを選ぼう」の一文が書かれている。それに足を止めて何事かを囁き合っている女の子たちがいる。学校の制服だ。服装からすると、一般審査員だろう。

今日の最終審査は、一般投票の持つ意味合いも非常に大きい。この仕組みは、審査員のプロの評価とは別に、これからアイドルとして人気が出るかを図るためのものだそうだ。携帯から専用サイトにアクセスして一票を投じるのだ。だから、歌う曲も幅広く人気があるものを選んだ。後は、私服もポイントだ。アイドルである以上、誰からも可愛いといってもらうためには、ファッションリーダーという点も欠かすことが出来ない。今日は、いつもよりフリルが多めで、先週の休みに買った真新しいものだ。自信は誰よりもある。

二人は、いったいどんな服装で最終審査に臨むのだろうか。きっとナミは、スポーティーだけど色気のないパーカーを着てくるだろうし、アサヒは可愛いけれど自分的には女の子らしさにかけるシンプルな服だろうと予想してみる。

「やっぱり服装ならヒナタの、エンジェルな私服が一番だよな」

そう呟くと、軽い足取りで元気良くオーディション会場へとスキップしながら歩き始めた。

お台場の屋外、特設ステージは、ひと際、輝いて見えた。これから、ここで四方から視線を浴びながら歌って踊ることになるのかと思うと、たまらない。ペルソナとして活動してみて分かったことだが、ステージに立つ快感は特別なものだ。そこからの眺めは何ものにも代えがたかった。

いつからアイドルを目指し始めたのかは、自分ではよく分かっていない。だけど自然と将来はアイドルになりたいと思うようになっていた。

「どうしてなのよ。絶対に納得いかない」

ベンチに座るなりアサヒは、虚空を睨んでいた。全てを出し切ったという充実感と、それに反する重たい疲労がのしかかる。本気で臨んでいただけに悔しさもひとしおだ。

帰路につく観客が目の前を、ぱらぱらと通りすぎるが、誰も落ちた人間の顔など覚えていないのか声をかけられることはなかった。

「やっぱり凄かったよね。あたしさ、超感動した」

「だよ。かっこよかったなあ。少し泣いちゃった。今からCDデビューが楽しみ」

「だね」

観客だった女の子たちが次々と駅へと向かう。その口から洩れた、CDデビューの一言が胸に突き刺さる。それは勝ちぬけば手に出来た合格者の特権だった。こうして誰からも顧みられないのだから、いくら健闘しても甲子園の準優勝チームの名前は記憶されないというが、それは本当だと思う。

「ヒナタもショック」

「あたしも」

気がつくとも三人で並んで座っていた。最終審査の結果は全員が不合格だった。今となっては、大きく貼り出されたオーディション告知のポスターが恨めしい。会場のあちこちに貼ってあるので嫌でも目に付く。

「何がいけなかったのかな？ 何かひっかかっていることはあるんだけど」

「その服だろ。絶対にアウト」

ヒナタ自慢の、ひらひらのレースが付いた服を、ちらりと見ながらナミが言った。

「ナミだって人のこと言えないじゃん。いつも着てる服は男の子っぽいのだし、全然かわいくない」

「あたしは、クール系なんだよ。ぶりっ子みたいな恰好はポリシーに反するんだ」

「それ絶対に間違ってるよ」

「何だと。このコーディネートの良さが分からない神経の方が、理解できない」

みるみるうちに口を、への字にナミが曲げ始めた。ヒナタも頬を膨らませて、ふてくされた顔をした。

「もうやめなよ」

先ほどから黙っていたアサヒが鋭い声をあげたので、二人が振り返る。

「ここで言い合いしても、しょうがないじゃん。それにちゃんと反省会やるって話だったでしょ？」

「けどさ、納得いかないんだよ。アサヒは悔しくないのかよ？」

「それは悔しいよ。けど落ちたのには、それなりの理由があるはずでしょ？」

「はあ……それが分かれば苦労はしないって。だからこうして沈んでるんだよ」

それについてはアサヒも反論ができない。そのことを、ずっと考え続けているだがいまだに答

が出てこない。そして考えれば考えるほど、ショックが込み上げてきて、どうしようもない感情に襲われるのだった。

「やっぱり、ヒナタたちは賞味期限切れなのかなあ」

ぽつりと発した一言で二人の顔色が変わる。今では来年で二十歳。成人を迎える年齢になって普通は喜ぶのだろうが、アイドルを目指している身としては嬉しくとも何ともない。むしろハンデだ。やはりアイドルは若いにこしたことはない。そのことを思うと絶望的な気持ちになる。

「顔は中の上でルックスも中の上なうえに、賞味期限切れ。だあぁぁ。もう終わりだ！」

ナミは頭をかきながら、うめいた。

「君たち、お友達かな？」

暗い気持ちでいた三人が、生氣のない目で声のした方へと視線を向けると、チャライ格好の男が近づいて来るところだった。

「おっさん。ナンパなら悪いけど間にあってる」

「おいおい。酷いな、おっさんって。そんなに老けてみえる？ それに、いやらしい目で君たちのこと見てたんじゃないんだ。誤解しないでくれよ」

そういう男は、茶髪に長髪ながら歳と格好が合っていないためか、酷く胡散臭かった。ジャケットはきちんと羽織ってはいるが、どうみても遊んでいる雰囲気だ。

「実は、凄くいい話があるんだよ」

「ヒナタは騙されないもん。どうせ、お金だけ受けとったら持ち逃げする気でしょ。もう、その手にはのらないんだから！」

「いやだから、人違い、人違い。持ち逃げも詐欺もしたことないよ。そんな悪い人に見えるかな。いやぁショックだなあ」

弱ったという風に男は軽く頭をかいた。

「あの一。じゃあ、どういう目的で声をかけてきたんですか？」

「お。話が分かる子だね。君の名前は？」

「若松アサヒです。って、そうじゃなくて理由」

つい、自分から名乗ってしまい慌てて口を押さえたが、もう遅い。

「それがさ、君たち、さっきのオーディション出てたでしょ。絶対に受かった子たちよりセンスあると思うんだよね。もったいないよね。こんなダイヤの原石を前にして、その可能性に気が付かないなんてさ」

「そ、そうか。やっぱり審査員の見る目がなかったんだ。だよな。そうじゃなきゃ、落ちるわけないもんな」

「そう。そうなんだよ。ところで、ボーイッシュな君の名前は？」

「河内ナミって言います」

「じゃあ、そっちのピンクの派手な服を着た君は？」

「音羽ヒナタ、永遠の十六歳で地上の天使です♪」

「はははは。いや～参った。君たち本当に面白いね」

「それより早く理由を教えてください。じゃないと、もう帰ります」

「アサヒちゃん、そう怒らないでよ。ちゃんと話すからさあ」

「アサヒちゃん？」

初対面の男に、いきなりなれなれしくされると気分が悪くなる。アサヒは、どんなにしつこく誘われても絶対の断ってやると決めた。

「実はさ、僕は芸能プロダクションの社長なんだ。そんなわけで今日のオーディションを見に来たわけだけど、どうしても君たちに関心がいっちゃってね。もう、これはスター間違いなしって思ったから、つい声をかけちゃったんだよ」

名刺を取りだすと、すかさず三人に配ったが、記載されていた事務所名には心当たりがなかった。

「あたし、信じない。芸能界で仕事してるように見えないもん。何か適当そうだし。それに審査員席にいなかったもん。どう考えてもナンパ目当てだと思う」

「確かにそっちの審査員じゃはない。でも、ちゃんと一般審査員として君たちに投票したんだよ。だったら、君たちが最終選考で歌っていた曲を当ててみようか？ 渡良瀬橋

、Desire、LOVEマシーン。これでどう？」

芸能プロの社長を自称した男は、三人の顔を順番になぞるように見ながら曲名を、すらすら答えると満足そうな顔をした。これでどうだというつもりらしい。

「ただ単に見てたってだけでしょ。バカらしい。ナミもヒナタも行くよ」

アサヒが声をかけて立ち上がろうとすると

「待った」

男は三人の目の前に両手を開いて立ちふさがった。そして、「話を聞いてくれ。悪いようにはしないから」と言って、手を合わせ始めた。

面倒くさくなったアサヒは、二人を目で促して、方向を変えて立ち去ろうとする。

「CDデビューする気ない？ うちなら出来るんだよ」

「え？」

その瞬間、アサヒは振り返り立ち止まって相手を見つめていた。だが、それはナミもヒナタも同じことだった。

「おい、アサヒ、もう少しおっさんの話も聞いてみようぜ」

「そうだよ。聞くだけならタダなんだし、損はしないよ」

「それはそうだけど……」

「お。ついに君たちも興味が湧いてきたね。いいよ～。チャンスの女神は前髪しかないって話は知っているかな？ 今がまさにそれだ。これを逃す手はないね」

男は、ずいっと一歩近づきながら満面の笑みをみせた。その眼には不思議な力があって、自然と惹きつけられた。

「うちのプロダクションでは、即戦力を求めているんだよ。事務所の将来を担うような、超ビッグアーティストをね。その社運をかけた一大プロモーションに君たちを起用したいのさ。レッスンは受けてもらうけど、直ぐにCDデビュー出来るんだ。こんなチャンスは、もうないよ。それに君たちを三人組のユニットとして売り出すつもりだ。どうだ、悪い話じゃないって分かってもらえただろう？」

「三人組・・・・・・・・」

誰となく、その一言を呟っていた。

「そう。僕が見た限りでは、君たちが落ちたのは一人ずつの審査だったからだ。でも、どうだろう。三人で歌うと考えてみたら。それなら断トツでアサヒちゃん、ナミちゃん、ヒナタちゃん、君たちが一番だよ。審査員たちは、個人個人の技術しかみてなかったんだ。だからユニットとして参加していたら君たち三人の優勝だ。それが僕には分かった。だからこうして声をかけたんだ」

男の熱弁に誰もが心が揺れていた。正直なことを言えば、反省会を開いても見つからなかった答えを、この見知らぬ初対面の男が見抜いたことが驚きだった。ずっとルックスやスタイル、それに年齢が原因だと思っていた。でも、問題は個々がばらばらに審査されたことだった。ステージに上がった時に感じた違和感は、たった一人で歌うことだったのだ。

「ちょっと集合」

アサヒは二人に呼びかけると、ベンチ奥の木陰に引っ張り込んだ。

「あたし気がついたんだけど、やっぱりアサヒとヒナタがいた方が、何かしっくりくるっていうかさ」

「ヒナタも同じ。やっぱり三人がいいよ」

「そうだよ。確かに一人のアイドルになりたいことに変わりはないけど、本当のことを言うとソロデビューはまだ早まって考えてたんだよね。今は三人で競い合う時期だって」

「そうそう。自分じゃ分からなくても、相手の悪いところは指摘できるしな」

「これからはヒナタたち、組みながら、独り立ちするために勝負だね」

「よし。じゃあ決まりだね」

腕を差し出すと軽く円陣を組んだ。もう、賞味期限切れなんて怖くも何ともなかった。

「おや。打ち合わせはもう終わりかな？ それも、これからユニットを組んでもらう立場からしたら、いいことなんだけどさ。それじゃあ、肝心の返事を聞かせてもらおうかな」

戻って来た三人を見ると、満面の笑顔をとたえたまま男は聞いてきた。息を軽く吸い込むと

「あたしたち、アイドルになります」

息は、ぴったりでそれが答えだった。

晴れやかな表情をした三人を見渡すと、男はそれぞれに封筒から紙を差し出して配った。

「その熱意があるうちに、契約書にサインしてもらおうかな」

「ここで？ いくらなんでも早くないか？」

「そんなことないさ。金の卵をさらわれるわけにはいかないからね。それに、こっちも準備があるんだよね。サインを貰う貰わないじゃ、やる気が違ってくるわけ。実際の活動はまだ先だけど、レッスンのスケジュールの都合とかもあるし、明日からびしびし働いてもらうわけじゃないから、そんなに気にしなくても大丈夫だよ。それにこうして、やる気になっている日の方が気分もいいし。今日が始まりだったんだって感じするでしょ？」

「よし。ヒナタ、サインする」

「あたしも」

「ちょっと待った。よく契約書は読んだ方がいいぞ。『男性アイドルとして売り出す』って書か

れてるかもしれないし」

男から渡されたサインペンに手を伸ばしかけた時、ナミが言った。興奮していて、冷静さを失っていたアサヒとヒナタは急いで手を引っ込めた。

「そ、そうだよ。よく読まなきゃ」

「ん？ 男性アイドル？」

「いや、その、何でもありません。あはははは」

アサヒは慌てて誤魔化した。自分でもちょっと、わざとらしいかなと思ったが怪しまれずに済んだ。余計な一言を口走ったナミを軽く睨んだが、本人は何食わぬ顔でとぼけている。

三人とも署名を終えて手渡すと

「そうそう、これが事務所までの地図。今度の休みに遊びに来てよ。絶対に気に入るからさ」

引き換えに事務所の場所が印刷されたフライヤーを貰った。

スタープロモーション、代表者として野崎達也と書かれている。先ほどは名刺を受取った時、大して見もしなかったのが記憶していなかったが、この茶髪で長髪の男は野崎という名前らしい。フライヤーと野崎の顔を三人は交互に見比べた。

「じゃあ、ちゃんと来てよ。うちの看板アイドルなんだからさ」

「よろしくお願いします」

アサヒ、ナミ、ヒナタは丁寧に頭を下げた。それを目を細めながら見ていた野崎は、自分から手を差し出してひとりひとり握手をした。

<次回 ドキドキ！事務所潜入の巻に続く>

メン★ドル

<http://p.booklog.jp/book/31444>

著者：黒色大聖堂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/10961941/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31444>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31444>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.